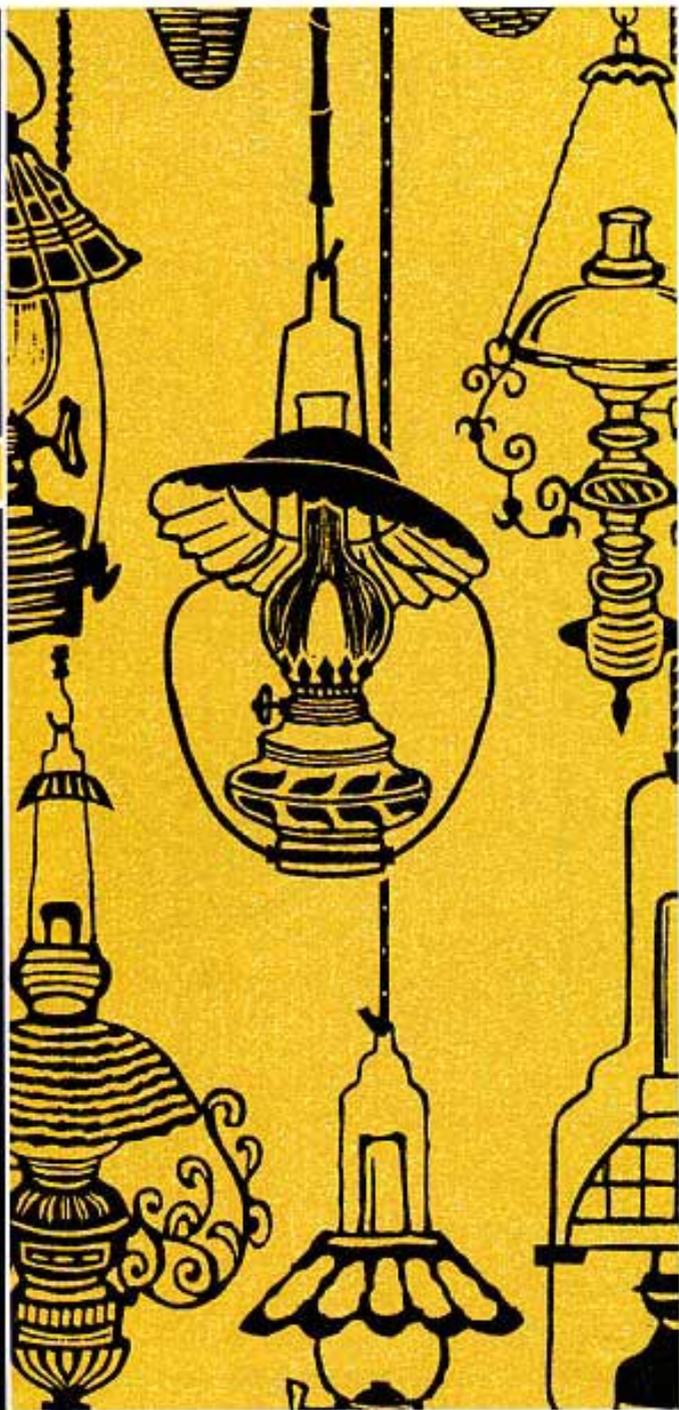


春燈

6
月号

JUNE 2007



安住 敦の句

風邪の子に薬のましむとおのが口あけ

句集『まづしき饗宴』昭和十五年

『まづしき饗宴』は戦前の敦の新興俳句時代の句集。本集の大方はへくちすへばほづきありぬあはれあはれなどフィクションの作品である。しかし、本句は日常に材を採ったもので、敦の心の真実が宿る。破調のリズムから父情がぎこちなく滲み出て妙。戦後、春燈を興してからの句集『古暦』所載のへ雁啼くやひとつ机に兄いととなどの代表作へ繋がる句。

鈴木直充

安住 敦の句

雨降つてゐる金魚玉吊りにけり

句集『古暦』昭和二十一年作

初心者の頃、句集を書写してこの句に出合った。平易な表現に何という深い感慨。たちまち好きな句に。今回この句が「八月十五日終戦」と前書のあるあの有名な〈てんと虫一兵われの死なざりし〉の翌年の句と知った。あの深い感慨は、まさに生死の迫間から生ずべくして生じたものだった。御葬儀に参列できなかった私に授かった句 〈雨に吊つて金魚の居らぬ金魚玉〉

上野 昌子

西ヶ原日記

(31)

鈴木榮子

九十九里春来て人に遠目差し
独逸名菩^{リンデン}提^{デン}樹^{baum}はないまだ
山鶯気の済むまでをうれし鳴き
書齋とて六畳二間縁に籐椅子
遠見には海はも同じ卯波寄す

笠森観音高きに組みて春おぼろ
万太郎句碑を尋めゆく径の沈丁花
演説館の春陰 肱付古木椅子
ベルサイユ型旧正門の春夜寂
飼はれては獺は祭を流しけり
笠森観音十一面の春おぼろ
藤房の短き下にカツサンド

当麻練供養

松本俊介

当麻路や行くほどに濃き草いきれ
女人一途の祈り伝へて寺涼し
緑さす当麻曼荼羅開扉かな
娑婆堂に姫合掌のうすごろも
忽ちに起こる声明練供養
稚児に付く黒留袖や汗の鼻
笙の吹く天上の楽青あらし
頭でつかち菩薩よろめく日の盛り
人散つて音取り戻す苔清水
かはほりや暮れ残りゐる双つ塔

先島諸島

栗原完爾

赤屋根にシーサー夏の立ちにけり
扉にかける魔除の貝や明易し
不喰芋の奔放過疎のすすみけり
椰子蟹の籠にさびしき朝曇
水牛のながき睫毛や風青し
三線は短調なるや仏桑花
泡盛の甕のしづかや父の忌来
浜に寄す異国の瓶の薄暑かな
バス止める岬の馬や夕立雲

当月集

鈴木 榮子選



○ 横田初美

啓蟄や鯨抑ふる力石(香取神宮)

烏どもも溺れてをるや花の中

花筵青し赤子をおよがせて

ゆるやかに吐く息桜ちらしけり(太極拳)

観桜の宴も終りの塩茶かな

○ 佐々木 新

ドアノブの仄かな湿春(しとち)の闇

白樺の老樹はそつと芽吹きけり

この辺り獣の墓所涅槃西風

鳥雲にトンネル鉄扉開け放つ

桂月の逝きし湯宿や雪解沼

○ 布村松景

早蕨の拳小さく風の道

啓蟄や鳶の足場の輪奈結び

啓蟄や足裏に馴染む朴歯下駄

釣り糸を垂れて日永の長寿眉

落味噌に母語りあふ夕餉かな

○ 三代川玲子

まつさらに四月一日はじまりぬ

菜種梅雨百万遍の数珠手繰る

花冷えやお納戸色に川暮るる

烏の巢黄色いりボン編み込まれ

寄居虫や潮をしたひてひきずる尾

○ 小林 昭

癌めらと生きながらへて春となる

癌の句のマンネリ恐れぬて余寒

癌転移なしのことや青き踏み

癌の奴つきまとふ死を思ふや春

癌の句のやがて百句や春炬燵

春燈の句

鈴木 榮子選



三寒の疑惑は四温に解けにけり

水温むやさしき言葉に涙ぐむ

ルノワールに一辺倒や春臙

春衣購はぬ決意の崩れけり

梅の香を息深く吸ふ小さき幸

目刺焼く終生貧を口にせず

春雨傘おのおのに買ひ旅家族

台北に一ト日の緑鳥帰る

妙義嶺を残して四方の霞みけり

北窓開き世の中広くなりけり

釣人の魚籠のうごくよ花ぐもり

児を抱きし妻にさしかく春日傘

紙雛重なつてをり震度三

桜守の眸の中の老桜

台北 呂 秀文

台北 陳 妹蓉

埼玉 茅 貴美子

京都 懸林喜代次

新調の電動自転車風光る

難波津へみやこより来ぬ花筏

若き僧修二会の闇を踏みしだく

春月や夜のどこかが香りゐて

遙かより呼ぶ声のあり鳥帰る

風流れ雲流れ今日卒業す

服のよき茶の一ト口や利休の忌

金と黒茶碗が語る利休の忌

似て非なる茶道の流派利休の忌

幽玄や薄暮に香るリラの花

お下りのスーツ二度目の入学す

漁師らの炙る干鰯や昼の雨

春惜しむ態して老いのベンチかな

ハンディの子の掌に受ける落花かな

千葉 中嶋 昌子

東京 武田 宗陽

東京 増田 大

余言

鈴木 榮子

はるばると涅槃図訪ね東福寺

徳重 澄子

東福寺の涅槃図は裾の方に猫が描かれているので有名。猫が魔性？を持つゆえ入れられなかったのか、遅れて馳けつけたためか、その絵師がしげしげと通ってくる猫を哀れに思つてか、たしか向かつて右隅に猫が描かれていた。

これも禽獣虫魚など五十二類の衆生すべての愁嘆場の有様を描いているので中々有難いものである。

お下りのスーツ二度目の入学す

増田 大

スーツというと社会人のそれを思うが、今は大学生もあたりまえに着ている。このスーツ、兄が大学生時代に着ていたものを、弟がそのお古を着て入学したのである。親としては学生の入学に一々スーツを新調してはたまつたものではない。入学はするけど、その入学式のスーツはご本人の兄のものであろう。それをスーツが二度目の入学と俳諧

的に面白く表現したのである。

春の鴨残り顔して池の面

山川 好美

わが家の近くでは、古河庭園、六義園、不忍の池と鴨を見る機会が多い。この鴨も渡りが始まってもう翔つ鳥は翔つてしまったのに一向にすまし込んで残っている。

確かにそういう鴨が古河邸の池にも、何の不思議もなく居残っている。全く一羽というよりも同じ思いの仲間がいるかも知れない。春深くなつてもまだ帰らず夏鴨として一年中棲みついているものである。

どうして帰らないのか、一度聞いてみたいものである。日本で越冬して北へ帰るのを止めたのは何故か。

「鳥雲に入る」は実景も見た上での季語であるが、先人の叙述には東洋的詩美があると言われているが、よい例である。

やま川と交しし文や春の雪（夢二美術館）久本久美子

東京吟行会で本郷の弥生町へ行った。夢二美術館は新たに美術館として建てたものではなく、東大裏の弥生門から池の端へ出る道筋にある建物だ。広くはないが体をぶつける程狭くもなく、あの町のなんの跡だったのであろうか。個人の住まいにしては大きい洋建築の家だった。

竹久夢二を知る上には、またファンには何時間でも触れたい追憶の夢二がいた。